厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担研究報告書）

全国がん登録と連携した臓器がん登録による大規模コホート研究の推進及び高質診療データベースの為のNCD長期予後入力システムの構築に関する研究

（研究分担者　佐藤雅美・鹿児島大学大学院呼吸器外科学分野・教授）

研究要旨
（院内）NCDと（院内）がん登録のコラボによる（院内）業務効率化と外科診療・手術の精度向上ならびに全国地域がん登録の精度向上に向けた提案を行った。院内がん登録と各病院内診療科NCD、さらに施設長（病院長）が病院内で病院業務として有機的に協力することで、新がん登録法の元で、NCD情報とがん登録情報の共有化は可能と考えられた。
さらに学会主導の肺癌登録とこれを活用した国際的なTNM分類改訂への関与、論文による日本の貢献状況を解析するとともに、今後の展望として学会主導の肺癌登録事業とNCDとの整合性・将来展望などについて、検討を行った。今後、NCDとの協調による発展が期待された。

A．研究目的

①全国がん登録には院内がん登録および地域がん登録の情報が集約される。その情報の精度を最も効率よく向上させるには、診療科レベルの情報を効率よく反映させることである。一方、このために診療科の業務が拡大することは、一般臨床への影響も大きい。これら現状を鑑みた場合、すでに各診療科で施行しているNCDへの登録内容を院内がん登録に移行する、あるいは、診療科が院内がん登録入力を代行するなどの方法が考えられる。そこで、その実施に向けたシミュレーションを行いその問題点を明らかにする。

②学会主導の肺癌登録とこれを活用した国際的なTNM分類改訂への関与、論文による日本の貢献状況を解析する。

さらに、今後の展望として学会主導の肺癌登録事業とNCDとの整合性・将来展望などについて、検討を行う。

B．研究方法

①各診療科で施行しているNCDへの登録内容を院内がん登録に移行する方法とその問題点、さらには、診療科が院内がん登録入力を代行するなどの方法とその問題点、インセンティブについてシミュレーションを行い検討する。

②全国肺癌登録議事業の登録実績、およびその解析による論文発表の状況を検討する。さらに、UICC TNM分類改訂第8版への貢献状況を提出症例数や世界の地域別の比率などから検討する。

これらを踏まえつつ、今後の展望について検討する。

（倫理面への配慮）

①いずれの研究もシミュレーションによるものであり、実局面ではないため、倫理的問題は生じない。

②いずれの検討も個人情報を含まないものであり、倫理的問題は生じない。

C．研究結果

①：診療科NCDデータの院内がん登録への移行に関する検討：

各診療科が所有するNCDデータを院内業務への協力として、院内がん登録に提供することは、法的には問題ないと考えられた。同時に、このことは、院内がん登録事業の精度向上と業務の省力化につながる。

一方で、NCDデータを提供する診療科サイドでは、業務量の増加となるのみで、診療科サイドで、この方法を積極的に進めることにはつながらない。

しかしながら、院内がん登録従事者がこれまで、診療科が施行してきたNCDデータの入力を行うのであれば、診療科サイドの協力が得られる可能性が極めて高いと考えられた。

②肺癌登録事情として、現在まで

外科症例の後ろ向き登録36024例、内科外科前向き登録14,925例が行われた。

これらの事業を通して、経年的に術後生存率の向上、I期症例の増加、腺癌例の増加と扁平上皮癌例の減少、高齢者比率の増加、縮小手術の増加と術後合併症の減少などが明らかになった。また、第5次事業（2004年手術症例）から10編の英文論文が刊行されていた。さらに、これらの登録事業を通して集積した47306例がIASLCのstaging committeeに提出され、UICC TNM ver 8の改訂に活用された。世界の地区別の貢献度ではアジア地区が最も大きな貢献をしており、その中で日本の占める割合が極めて大きかった。

D．考察	E．結論
①インセンティブの設定によっては院内NCD情報の院内がん登録への移行はスムースに開始可能である。 ②肺癌切除例に対する5年ごとの4学会合同の肺癌登録事業は、肺癌切除例における生存率、術後合併症、組織型、術式、年齢層の推移を的確に把握しえていた。これらを通して、多くの論文を著名な国際雑誌にも投稿できていた。さらには、これらの症例はIASLCのstaging committeeに提出され、UICC TNM ver 8の改訂に大きく貢献した。	①インセンティブの設定によっては院内NCD情報の院内がん登録への移行はスムースに開始可能であると結論できた。 ②4学会合同の肺癌登録事業では、肺癌切除例における生存率、術後合併症、組織型、術式、年齢層の推移を的確に把握しえていた。また、多くの論文を著名な国際雑誌にも投稿できていた。さらに、これらの症例はIASLCのstaging committeeに提出され、UICC TNM ver 8の改訂に大きく貢献した。 今後、NCDとの協調による発展が期待された。